



年次晩餐会で挨拶する宮下秀樹会長

東京に戻って変わりなく開催 平成19年度年次晩餐会



2007年(平成19年)
12月号(No. 751)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

平成19年度年次晩餐会	
東京に戻って変わりなく開催……1	
日本山岳会への提言	
日本山岳会が目指すべきもの……4	
上ホロカメツク山雪崩遭難事故……6	
図書委員会の活動の現状……7	
東西南北……8	
70歳で沢登りの魅力が蘇る	
登山と社会奉仕活動	
大磯の左儀長	
活動報告……10	
総務委員会/集会委員会/山研運営	
委員会/アルパインフォトクラブ	
支部だより……12	
岐阜/熊本	
図書紹介……14	
図書受入報告……15	
会務報告……16	
ルーム日誌……17	
新入会員……17	
会員異動……18	
INFORMATION……18	
さんけん通信……19	

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10~18時
年末年始休室・12月29日~1月6日

■ 460人が出席
平成19年度の年次晩餐会は12月1日、東京・品川のグランドプリンスホテル新高輪の国際館パミール3階「北辰」で開かれた。昨年は名古屋だった。2年ぶりに東京に戻って、いつもと同じように淡々と、なごやかに開催された。460人の会員が出席した。

■ 会長挨拶

宮下秀樹会長の挨拶で始まった。宮下会長にとっては、今年5月に

会長となって初めての晩餐会だ。皇太子殿下は残念ながら出席されなかった。宮下会長は、皇太子殿下から「日本山岳会の年次晩餐会に出席できず大変残念だ。出席のみなさまによりしくお伝えください」という言づてのあったことを紹介。また北海道での遭難事故に弔意を表したあと、日本山岳会の現状について次のように報告・挨拶した。

一、会員数の減少が続いている。平均年齢は65歳で、高齢化も進んでいる。若い人たちの入会をなんとか実現させたい。9月には、中国登山協会の会長と韓国を訪問し、

中断していた日本・韓国・中国の学生交流登山を復活し、来春、日本で実施することにした。過日、指導委員会主催で積雪期入山者に

対する山岳遭難救助シンポジウムを開催したところ、若い人が10人以上も集まってくれた。雪山に入る若い人たちがまだまだたくさんいると感じた。

一、本年度から各理事にも委員会を担当してもらうことにした。委員会と理事会のよりキメ細かい連携を図るためだ。17の委員会があるが、大半は首都圏を中心とした動きなので、なんとか全国的な視野に立った活動ができないかと考えている。

一、新しく栃木、茨城、千葉に支部が設立され全国28支部となった。多様で活発な活動をしているだいており感謝している。支部懇談会は、来年は10月11~12日に北九州で開催される。

一、公益法人か一般社団法人か



慶雲の間に展示された絵画の数々

を選択しなければならぬ。プロジェクトチームで検討しているが、公益法人の場合は支部との連結決算を求められることが予想され、苦慮している。将来的には、東京首都圏を含め全員が支部に入っていたくことを視野に入れ検討を続けていきたい。

■新名譽・永年会員の紹介

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は46人。牧野衛、山本朋三郎名誉会員らが逝去された。11月には北海道支部定例の雪上訓練で突如発生した雪崩により4人の仲間を失った。心からご冥福をお祈りし

たい。

続いて新名譽会員が紹介された。若林啓之助、平山善吉、黒石恒の3氏。平山・新名譽会員は「一昨年は100周年記念事業をなんとか無事に実行することができた。みなさんのご協力に改めて感謝したい」などと挨拶した。

新しい永年会員は36人。1957年4月から翌年3月までに入会した会員だ。マナスル初登頂の余韻が残っていた年だった。以降継続して50年間、会員として活躍された。会員番号は4498から4651である。うち20人が出席し、宮下会長から永年会員章が手渡された。新永年会員を代表し、中村純二会員は「あつという間に50年が過ぎ去り、山岳界はおおきく変化した。山登りには、困難な激しい未知のルートへの挑戦だけでなく自然のふところに入って思索にふけるスタイルがある。リーダーまかせでなく、自分なりの山を選び、山登りを続けてほしい」などと挨拶した。

新永年会員

阿部和行、蒲生明登、池田昭二、和崎俊雄、岸本伍郎、大森弘一郎、中藤剛、佐藤晴夫、福原健司、石

村実、中村純二、今澤寛、杉原八百樹、高本孝、吉野禎造、前田清子、藤野欣也、滝澤信三、大谷一良、金光義朗、風間満治、吉田英吉、鈴木淳平、寺本湜、松本健夫、本間兌二、田邊壽、鈴木康仁、山野井武夫、芳賀孝郎、平井一正、岩坪五郎、中島道郎、村上力、小峰顕一、斉藤健治

■秩父宮記念山岳賞

第9回秩父宮記念山岳賞は、松本健夫会員の「岡日嘔布（カンリガルポ）山群の踏査と研究」と決まった。表彰式が行なわれた。松本会員は「横さんをはじめ、諸先輩に実いろいろなことを教えても



秩父宮記念山岳賞を受賞した松本健夫氏の講演

らった。それを実行していった。諸先輩・後輩に支えられての賞だ。喜びを分かち合いたい」と語った。

■新入会員は99人

続いて、新入会員の紹介。今年は99人が新しく会員に加わった。代表して深田森太郎会員が挨拶した。深田新会員は故・深田久弥元副会長のご長男である。久弥氏の会員番号は1586番だった。「たいへんな伝統と歴史のある会の一員に加えてもらって喜びと緊張を味わっている。白山の自然保護などを通じお役に立ちたい。私ごとながら、父が楽しそうに『ルームへ行く』と言って出かけていたのを記憶している。会員番号が若いといって自慢していた。入会したと言ったら、おまえなんかまだダメだと。私の会員番号は1万4000台。父より1万3000近くも多いことに歴史の重みを感じる」などと語った。

恒例の鏡開きは、宮下会長のほか平山新名譽会員、松本健夫会員、中村純二新永年会員、阿部和行新永年会員、深田森太郎新入会員の6人で行なった。酒は故・第十五代今西壽雄会長の夫人から寄贈の

社)日本山岳会 平成19年度 年次晩餐会



壇上で紹介された新入会員

あった「四海王」。いつもながら、感謝したいと思う。

阿部新永年会員の音頭で乾杯し、会食が始まった。メニューには「実り多い秋の山をイメージ」、「雪山に登ったあとに花園に降りてきたようなイメージ」などのメッセージが添えてあった。

会食をはさんで全国28支部会員の紹介があった。北海道で悲しい事故があったが、支部の活動は活発だ。新しく発足した栃木支部からは8人、茨城支部からは9人、千葉支部からは28人が参加した。参加者は紹介されるたびに立ち上がりハンカチを振った。それに応え、盛大な拍手が会場いっぱいにな

広がった。

■海外遠征・登山報告

晩餐会に先立ち、午後2時30分から1階「紅玉」の間で海外遠征報告、また秩父宮記念山岳賞受賞記念講演があった。

まず大蔵喜福会員のマッキンリ1気象観測報告。5715メートル地点に定点気象観測所を設置して収集したデータから、気温と湿度、風速と圧力、気圧による高度変化などについて解説・説明し、「1990～2000年の11年間に記録した最低外気温度は95年12月のマイナス59・4度、プロペラ型センサーによる最大風速は94年7月の82・5メートル/秒だった」などと報告した。

続いて石川支部のインド・マリ峰登山報告。支部の創立60周年を記念して初登頂を目指した。登山許可が遅れ目的は果たせなかったが、近くの未踏峰に登ることができた。「マーン峰と名づけた」と話すと、「いいでしょう」と言ってくれた」などと、副隊長・織田伸治会員は話した。

平出和也氏はオリジナリティーのある山登りを目標にしているとい

う。パキスタン・シスパーレ峰(7611メートル)への挑戦を披露した。関西支部と同志社大学山岳部によるネパールのクビ・カンリ(6721メートル)初登頂・学術調査報告は、同志社大1年の小林博史君が行なった。学生全員が初登頂を果たし、学術調査では西チベット地域での氷河の後退を調査、温暖化の進んでいることを明らかにした。スウェン・ヘディンの報告との比較で約100年の間に氷河の舌端が1200メートル以上も後退したという。

■秩父宮記念山岳賞講演

第9回秩父宮記念山岳賞を受賞した松本健夫会員の講演があった。村木潤次郎・審査委員長の表現を借りれば、ナムチャバルワを西の端にして東側に延々と続く氷雪の山脈がカンリガルポ山群である。福岡支部が2001年から5回にわたって、この地域を踏査した。松本会員は調査隊長として活躍し、その成果を今年4月出版した。未踏峰が乱立している。山名も定かでない。ソ連の地図をベースに住民から直接聞き取り調査し、36座・37の山の名前を明らかにした。

松本会員は「屋久島で山の猟師

から谷の名前を聞いて調べたことがある。同じ手法だ」と話した。調査は植物、哺乳類、魚類、チベット仏教など幅を広げた。4月に出版した著書は800ページを超えてしまった。

■会場の催しと懇親山行

慶雲の間で、いつもながら多彩な催しがあった。日本山岳会が所蔵している絵画10点が、資料映像委員会によって展示された。普段は目録でしか知ることのできない絵画が並べられ、シュラギントワイトの石版画がひととき目を引いた。フリーマーケットでは、支部、委員会、同好会、同期会がそれぞれに山の本などを販売した。

翌日の懇親山行は、集会委員会が主催し、神奈川県の大山で行なわれた。丹沢山塊のなかで最も多くの人が訪れる山だ。晴天に恵まれたこともあり、参加者は80人を超えた。山麓は紅葉が残っていた。暖かい日だまりのなか、参加者は山頂で豚汁を楽しんだ。

(文)高橋重之、写真)神長幹雄

日本山岳会への提言

日本山岳会が目指すべきもの

平山善吉

高齢化や若者の登山はなれなど、登山界のかかえる問題は多い。そこで1年にわたって、日本山岳会への提言を連載してきた。

その締めくくりとして、前会長の平山善吉氏に想いを綴ってもらおう。

日本山岳会の山登り

最近の会報『山』で、各界からの提言がなされた。このなかで特に目を引くのは高齢化と若者の登山離れに対する懸念であった。これは現実の問題として誰もが認識するところであろう。しかし、この問題に対して具体的な提言があっただろうか。

高齢化と若者の登山離れは、今や我が国における社会的な大きな流れのなかの一環であり、この流れを本会が止めることはむずかしい。私は、むしろこの流れのなかで日本山岳会らしい方向と生き方を考えたいと思う。

本会は誕生して100年、かつての若者たちには、アルピニズムという大きな目標があった。そして皆この目標のために精進を重ねた。

先蹤者たちは、こぞって日本の

冬山に登り、バリエーションルートを開拓し、その夢はヒマラヤへとつながったのである。マナスル登頂はその頂点となり、その登頂が、更に若者たちを活気づけ、目標はヒマラヤの未踏の頂へと向かわせた。かりに、このような登山を動的登山としよう。

これに対し、日本の山や谷を静かに歩き、山の学術、芸術、文学などを愛し、山を語る人たちもいた。これらを先の登山に対し、静的登山と言おう。

マナスル登頂から今日まで50年、今やヒマラヤの未踏の頂はことごとく登られ、アルピニズムは終焉の時を迎えた。そしてこの頃、本会は、創立100年を迎えた。しかし、これによって本会の山登りは消滅したのではない。

私たちは、この100年を契機に更なる発展をしなければならぬのである。それは、本会には、先に述べたようにさまざまな山の登り方、山の楽しみ方、山の文化があるからである。そしてこの長い歴史と伝統に加え、豊富な人材がこれを支え、育んできたのである。私たちは、これらの歴史と伝統の上に立って、新たな活性化を求めなければならないと思う。

それは動的登山を選ぼうとも、あるいはまた静的登山を選ぼうとも自由であり、この選択に年齢の別はない。

公益法人について思う

国の法的整備の一環として、本会の置かれた社団法人が見直されることになった。このため、現在公益社団法人を視野に、諸準備が進められている。

本部においては、公益法人化検討のためのプロジェクトチームが組織され、支部ではこれを先取りして各種公益事業が盛んだ。これはこれでよいのだが、この問題は、本会の根幹にかかわる大問題である。

私はかねてからこの問題について、

て、メリット、デメリットを充分に調査し、会員にわかるような形でこれを示し、充分に意見を聞き、次の総会で賛否をとるくらいにしたらどうかと思っている。

公益法人には、公益的活動による活性化もさることながら、会務の処理には想像もつかない煩雑な事務も予想される。本会の目的とするところは何か、会員各位の判断が待たれる問題だ。軽々に結論を急ぐことはない。

登山を業とする会員について

私は、先の総会においてこのことについて強く触れた。これは決して思いつきではなく、私が会長就任以来の持論である。この話はまだ私が会員になったばかりの頃、北大OB中野征紀氏(初代北海道支部長、第一次南極越冬隊員)から聞いたのが最初である。中野氏は山岳会員のなかで、商売、選挙、宗教活動(3Sといっていた)をしてはいけないということで、これは日本山岳会の伝統であり歴史であるといわれた。

登山を業とする人たちは、一般に山が好きで元気だ。この元気が登山業にはしらせたのであろう。

会員に門戸を閉じることではないが、先の3Sは本会の伝統と考えたい。

パイオニアワークと登山文化

本会の目指すものは動的登山であれ、静的登山であれ、今まで多くの人たちがこの目標に向かって精進してきた。活性化された時代だったのだ。

会員が高齢化した今、どのような登山を目指すべきなのか。動的登山にせよ静的登山にせよ、年齢に関係なく、自ずから好きな登山を求めればよいのであって、同時に両者を求めることが出来ればなおよいことである。若くして動的登山に熱中した人が、高齢化した静的登山を求めるのもよい。またこの反対もある。本会は、これらの人たちに提供し得る情報に事欠くことはない。

ヒマラヤの8000メートル峰はことごとく登られたとはいえ、パイオニアワークはまだ残されている。そしてこれは決して若者だけのものではない。また、本会のなかには、100年の歴史のなかで蓄えられ、育まれた文化が豊富だ。そしてこれを大切にする気風もある。

本会の目指すものは、更なるパイオニアワークに対する支援と、資料と図書の整理と保存ではないだろうか。特に100周年のために集めた資料は貴重だ。保存が強く求められる理由である。

クラブライフとクラブルーム

クラブライフとは一体何だろうか。この定義はなかなかむずかしい。しかしそれは、山という共通の話題のなかで、みんなが楽しく過ごせる環境ではないだろうか。会員の誰かが新しい山に行き、そして帰ってきたらみんなでその話を聞く。こんなことが出来たらいいと思う。

土曜日はこのために時間のある人たちがルームに集まれる日にしたらよいと思う。そしていろいろな人たちが集まって話をする。出来ればこの時、経験豊かな長老の当番表を作り、会員はその表から話を聞きたい人がいつ来るかを知る。そして集まる。こんな集まりがクラブライフであらうし、この場所がクラブルームである。

私は、現在の集会室をもっと快適な空間として開放し、誰でもがここに来て会話し、特に地方の

方々が上京されたらここに顔を出す。こんな空間があったらいいと思う。また、このとき、事務室は一種の受付のような機能を持ち、これもオープンにすることが会員サービスの第一歩ではないだろうか。

伝統と品格

昨年の年次晩餐会(東海)のあと、新潟の会員から「あの行儀の悪さは日本山岳会なのか」マナー委員会が必要なのでは……というお手紙をいただいた。私も気になるところだ。ルームに入っても帽子をとらない。正式な会議でもだらしない服装をしている。喫煙席だからよいだろうと、隣席のご婦人から注意されても喫煙を止めない、食事中大声で談笑する、等々である。

先の会員は具体的に何が問題だったのか不明だが、要は日本山岳会らしくない不心得者がいたのだろう。

本会は今から100年前、7人の発起人によって立ち上げられた。そしてその人たちを中心に300人以上の当時から代表する文化人、知識人が集まった。本会は、英国のアルパインクラブに見習うところ

が多い。このときアルパインクラブはすでに50年の歴史をもっていた。後に英国のアルパインクラブは貴族の集まりで、日本山岳会が「知識人の集まり(田口二郎著『東西登山史考』)といわれた時がある。うなずく人も多いだろう。

また、私の若かりし頃、アルパインクラブの創立100周年記念式典に出席された横さんと松方さんの写真を『山岳』で見たことがある。両氏は、タキシードに黒の蝶ネクタイを結ばれていた。かつての日本山岳会は、この写真に象徴されるような会であり、当時、会を支えた人たちは、いわゆる知識人だった。

さて、伝統とは何だろうか。広辞苑によると「長い歴史を通して培い、伝えてきた思想と精神的なあり方」とある。私たちの多くはこれらの伝統を慕って入会した。この精神のあり方こそ、品格である。私たちは、そのとりまく社会のなかで紳士でなければならぬ。多くの人たちは、このようにして会を盛り立ててきたのである。このあたりで歴史をもう一度振り返り、その上に立って進むべき道を求めなくてはならない。

上ホロカメツトク山雪崩遭難事故

北海道支部

07年11月23日(土)12時5分ごろ、十勝岳連峰上ホロカメツトク山化物岩直下の沢筋で雪崩が発生し、雪上訓練に向かうわが支部の会員(うち1名が会友)11名が埋没、4名が死亡、2名が重軽傷を負うというかつてない重大な遭難事故が発生した。

この雪崩発生原因等については、執筆中の現在もいまだ確定していない。搜索の最中(23日12時35分ごろ)に、「ビーコン反応で掘り出すと知らない人(若い人)が出てきたので、びっくりした」(中村、植田、労山。朝日、読売)という事実があり、救出後、メンバーの質問に対し、化物岩付近の尾根を下降中に雪崩と一緒に落下したと答えている。このことは雪崩発生原因に関わることであり、警察の事情聴取も受けており、警察や関係機関の調査結果を待っているところである。

この訓練は、毎年この時期に実施しており、今年で6回目である。計画は、本年4月の定期総会に

おいて定例山行として提案、決定し、「支部だより」07年11月号で参加者を募集した。応募した16名に対し行動計画、装備等について通知したが、4名が事前に参加を中止し、12名が23日10時10分、十勝岳温泉凌雲閣前駐車場に集合した。

中村喜吉リーダーから、当日の行動予定と最近雪崩事故が発生しているのので無理な行動をしないなどの注意があり、10時40分、登山口を出発。途中スノーシュー着装の1名が深雪(新雪で50センチ)で歩行困難となり、下山する。11時50分、林道終点でスキーをデポ。55分、つぼ足でストックを補助に1列になって出発し、ヌツカクシ富良野川に沿って訓練適地に向かった。天候は小雪、微風、気温マイナス8度、視界100メートル。50歩でラッセルを交代しながら進み、事故発生時には鈴木和夫、助田陽一、吉澤宣哉、神埜和之、助田梨枝子、鶴岡節子、金子由美子、三野裕輝、植田惇慈、中村喜吉、北守清の順となった。

12時5分、Zポイントより100メートルほど進んだ地点で、進行方向右側高さ約30メートルの崖の上から雪崩が落ちてきた。「爆風とともにドーン」という音がして全員が雪崩の直撃を受け、埋まった(中村、植田、金子)。「体が宙に舞い上がった」(三野)。「突然ザーンと足をすくわれ流された。さらに二度目の流れる音がした」(北守)。「突然、後頭部、両肩、ザックの上部にガンという強い圧を受けたが、その後は覚えていない」(神埜)と、生存者は発生時の状況を語った。救出状況については、次のとおりである。

最初に①中村が自力脱出。続いて②植田が脱出し、中村が側で腕を出していた③北守を掘り出し。中村、植田、北守が北守の下にいた④助田梨枝子を掘り出し。すぐ脇にいた⑤金子、⑥鶴岡を掘り出し。⑦神埜は意識朦朧となりながら自力脱出し、近くにいた⑧三野を掘り出し。この前後から、付近で訓練中の札幌中央労山9名、札幌山の会10名も搜索に加わる。中村のいた地点から30メートル下流に埋まっていた⑨吉澤を掘り出す。最後にビーコンの反応で雪を3メートル掘り、

⑩鈴木を発見し、14時8分(時間は中央労山の記録)に掘り出し、鈴木とともに鶴岡、吉澤に対し15時30分まで心肺蘇生を試みたが、意識は戻らず脈拍もなかった。⑪助田陽一をゾンデ棒で搜索を続けたが、発見できなかった。現場は吹雪模様となり暗くなり始めたので搜索を中止し、15時50分、助田梨枝子をスキー2組で作った担架で搬送を開始。途中出動してきた警察救助隊のソリに寄せ替え、17時25分、登山口に着き救急車に収容した。

札幌中央労山、札幌山の会のメンバーは、意識不明者の心肺蘇生、3人を収容するためのテントの提供、右足骨折した助田梨枝子の搬送など、二次遭難の危険を顧みず救助活動にご協力をいただき、深く感謝するものである。

残る助田陽一の搜索は、翌24日早朝より警察、自衛隊、地元遭対協、当支部会員など110名体制で行なわれたが、午前8時50分ごろ、支部会員らが発見収容した。4人の死因はいずれも窒息死であった。

雪崩の規模、原因については、日本雪氷学会北海道支部が25日、

委員会紹介

図書委員会の活動の現状

現地で調査し、要旨「この付近で起きた雪崩としては最大級」標高1620メートルの尾根付近で、幅約70メートルで雪面が破断、40度の急傾斜を約300メートル流れ落ちた。犠牲者の出た沢沿いをさらに160メートル下った「積もった雪の上部だけが崩れ落ちる表層雪崩」と発表した。

26日と28日、四家の葬儀があり、突然肉親を失い悲嘆にくれる家族の姿に胸がつぶれる思いであった。12月8日、4人の遺族、宮下秀樹会長、神崎忠男、鰐坂青靑両副会長、会員、会友など120名の参加による「わが岳友との惜別の会」を開催、4人のご冥福と負傷者の早期回復を祈った。

支部としても、過去に大塚武支部長の遭難を経験しているものの、支部定例山行におけるかつてない重大事故を受けて、早急に事故調査委員会を設置し事故原因などの解明を行なうとともに、事故防止対策の確立を図り、二度と事故に遭わない体制作りを進めていく。

今回の遭難事故に対し、全国各支部から、また全国の支部会友から励ましの言葉や、温かい支援を賜りました。紙面を借りてお礼を申し上げます。
(長谷川雄助)

日本山岳会が独立したクラブチームを持ったのは1929年のことである。それは図書室の開設と軌を一にしている。戦災による焼失、1949年の再建と紆余曲折

はあっても、ルーム即ち図書室という本会の特色は今も変わらない。

図書委員会はこの図書室の充実と整備を任務として発足した。10年前に役割分担が行なわれ、ハード面は図書管理委員会、ソフト面は図書委員会が担当することになり、図書委員会は山岳文化全般にわたる幅広い研究と広報に専念できるようにになった。

以下に活動の現状を紹介する。

図書紹介

図書室に新着した山岳書のなかから会報「山」の図書紹介欄に掲載する書籍を選定し、執筆者を指名依頼する。毎月の「山」で3〜4冊紹介している。

新刊図書目録の作成

国内の膨大な新刊書のなかから

山に関連する書籍を選択し、目録を本会ホームページの「山の資料室/新刊図書」に逐次掲載する。

山岳図書目録の作成

過去1年間に刊行された和書・洋書から山岳図書目録を編集し、年会報「山岳」に掲載する。

さらに会員・非会員を対象とした公開の年間行事として、山岳文化に関する次あげるようなイベントを長年継続して企画している。

山岳図書を語る夕べ

第1回は1970年、深田久弥、島田巽、小林義正、田辺主計、吉沢一郎、吉田久兵衛の6氏の座談形式で行なわれた。本年は第38回、ナカニシヤ出版社長・中西健夫氏に「山岳図書の出版事情」と題して語っていただいた。

山岳史懇談会

第1回は1973年、「日本アルプス探検時代」、講師は三枝守博氏。本年は第36回、「東海支部の山登

り」、講師は寺西申生、尾上昇の両氏。近年まで大学・旧制高校山岳部と著名な社会人登山団体の歴史を主に語ってもらったが、現在は本会各支部の登山史に重点を置いている。

山を語る

第1回は1993年、「山岳書・古本屋の舞台裏」、講師は小林幹生氏。今年は第17回、「アルピニズムの源流」、講師は海津正彦氏。A・F・ママリーの歴史的名著「アルプス・コカサス登攀記」の新訳刊行を記念して、ママリーの人となりや、当時のクライミング事情などを話してもらった。

図書交換会

第1回は1968年、17回まで続いたあと中断していたが、昨年度に復活。次回は08年3月1日に開催する。詳細は「山」に掲載する関係記事を参照してほしい。

登山の多様化によって日本山岳会の存立の意義が問われる今、山岳登山文化の継承は「伝統ある」本会の強力な武器である。図書委員会はその一翼を担うものと自負している。
(平井吉夫)

N

東西南北

S

70歳で沢登りの魅力が蘇る

樋口宗一

最近になってまた、沢登りの面白さを思い出している。体が老いた今は行動の俊敏さに欠け、若い頃のようにすいすいとは登れない。そこで、ヤマブドウを採ったり、きのこを探したりし、ルートファインディングを楽しみながら、若い人たちとゆつくり沢登りを行っている。

今の若い人の沢登りは、ハーネスや登高器（ユマール）等の装備を使用している。われわれの若いころは、8の字結びやボウライン結びが主であった。

越後の山の沢は、降雪の多いせいか大小の滝や流水が多く急峻である。そのため、高巻きするにも

崩れやすい落葉土の斜面をへつることになる。

最近、五頭山連山・菱ヶ岳の与平沢と、越後の小柄な名山・弥彦山の滝沢の沢を登りつめた。

五頭連山・菱ヶ岳の与平沢は、登山口の不動ノ滝が現在では砂防堰堤のため昔の大滝の面影はない。この堰堤を乗り越えてから、与平沢の沢登りが始まるのである。

この沢の全体は、小さきまきまな滝と淵から成る。滝を登るときは岩がしっかりとっているので、三点支持さえ守って登れば快適であるが、淵を越えるときが大変である。

低山であるので夏は暑く、沢登りの時期は春秋に限られる。そのため泳ぐわけにもいかず、高巻きをするほかはない。急斜面の藪こぎと、草付トラバースを強いられる。特に、草付はシダ類と水分を含んだ苔類で滑りやすく、ザイ

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）



五頭連山・菱ヶ岳の与平沢で沢登りを楽しむ

ルワークで慎重な行動が必要である。

五頭山の一般コースは2時間ほどで登れるが、この山域の沢登りは速くて5時間、沢によっては8時間も頑張らなければならない。

次に、高頭仁兵衛氏のレリーフがある弥彦山の沢登りである。ここは、ロープウェーの下の沢張り川の源流の沢で、6月の初夏のころに登った。小滝の連続だが、岩はしっかりとっている。苔が付着して滑りやすい滝ではハーケンを打ち、ザイルで確保しながら登った。細い沢筋には常に一定量の水が流れており、シャワークライミングを強いられながら登頂する。

沢登りには危険が潜んでいるが、ルートファインディングをしながらその沢を完登した時の気持ちは、何ものにも勝る喜びである。それが沢登りの魅力だ。

70歳を越えた今も、沢登りの魅力が蘇る。出来ることならもう1度この歳で、五頭山の小倉沢に挑戦したいと考えている。

登山と社会奉仕活動

和田秀明

私は、初夏から秋にかけて北アルプスの穂高岳、槍ヶ岳、剣岳のバリエーションルートに行くために、週1回程度、低山縦走トレッキングをしています。場所は、地元・山口県内の鳳凰山（734メートル）、陶ヶ岳（250メートル）、神戸・六甲山などが中心です。

登山の前は準備体操をして、無理なく遅すぎるくらいのペースで歩き始め、しだいに歩みを早めていくと、体の中の血液の循環がよくなり、次第に体が温まってきます。「ふくらはぎは、第2の心臓」といわれるように、歩くこと、登山をすることは、血液の巡りがよく

なり、心肺機能が向上するなど、健康にとってもよいことは言うまでもありません。

登山の目的は、人それぞれだと思っています。とくに私の場合は、単独行が多いため、山行は社会性を持たず、純粹に登山行為となっています。しかしながら、何とか社会奉仕に思いついて始めたのが、献血活動です。登山をするしないにかかわらず、献血をしている人は多数います。

タイトルを「社会奉仕活動」としましたが、大袈裟なものではありません。これまで20年間で、113回(平成19年11月15日現在)を数えます。山でのトレーニングのおかげで健康体です。体力と血液と体脂肪はあり余る程あるので、不足しているところへ提供しているだけのことです。山でのトレーニングのついでに、山口の赤十字血液センターに立ち寄り、献血することがあります。(登山の前後、岩登りのときなどは、やめた方がいいでしょう)。夏場と冬場は、成分献血が不足しているということなので協力しています。

日本赤十字社の献血活動は、献血者の無償の気持ちと、善意で成

り立っています。最近では、日本骨髄バンクにも登録しました。白血病などの人たちを助けるためには、もう少し多くの登録者が必要なのです。

大磯の左儀長

祖父川精治

新春の小正月に全国各地で行なわれている伝統的な年中行事の、「ドンド焼き」は賽の神、またはセイノカミ、道祖神まつり、またサイトバライ等とも呼ばれている。お正月行事の締めくくりに、子供たちが集めてきた正月飾りや各家庭から持ち寄った古いお札、縁起物のダルマなどを聖なる火で焼却するものである。

そして、この1年間の無病息災を祈りながら下火になったオキの上へかざした焼きダンゴを食べるというものである。

例年1月14日夜に大磯町北浜海岸で行なわれる左儀長は古く江戸時代中期からと伝えられている。

全国的に見てもその規模は最大級といわれ、昭和53年、県指定の後、平成9(1997)年、国の重要

無形民俗文化財としての指定を受けている。

この日14時頃からJR大磯駅前では、ドンド焼きに使う細竹と紅白のダンゴの売り出しを始め、約1時間程度で完売となる。左儀長を見るために人々は夜暗くなつてから集まってくる。初めて見る人は明るいうちに会場の北浜海岸へ出向いて、円錐形に丸太、松竹やワラで組み立て先端に御幣の5色の吹流しのある高さ10メートル位の「サイト(柴灯)」の確認をする。持ち寄った正月飾り等のほか書初めも高く張り出してある。この各「サイト」はあらかじめ場所が決められ、地元の町内9地区から高さを



火が入り燃え上がる「サイト」、見物客から歓声があがる

競うように9基が砂浜の中へ築き立てられている。

暗闇の19時、9基の「サイト」へ火が入って赤々と燃え上がり、見物客から一斉にワッという歓声があがる。炎の回りが意外に早く、荒々しい白煙が渦巻いて流れ、満天の夜空を熱く焦がしている。広い砂浜、吹き抜ける風下が南の海側というこの立地条件も幸いしている。そのサイトが燃え崩れ倒れる時はアキという恵方(その年の良い方角)へ引き倒される。遥か遠く江ノ島灯台が明滅し、寒々とした冬の星空が凍るように光り輝いている。

引き続きエビス岩と親しまれた岩礁の前では、下帯姿の若者たちによる「ヤナゴッコ」という曳き綱引きが、海(漁)方、浜(農)方に分かれ、勇ましく豊漁祈願の儀式として始まる。

西に隣接する照ヶ崎海岸は明治18(1885)年、初代陸軍医官松本順によって開設された、わが国最初の海水浴場発祥地で記念碑もある。その先の岩礁地帯は、丹沢から尾根伝いにアオバトが海水を飲み集団で飛来することでも知られている。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

総務委員会

新入会員オリエンテーション

10月20日、第39回新入会員オリエンテーションが日本山岳会104号室と会議室において開催された。参加したのは1万4327番から1万4464番(対象138名)のうち23名。

定刻の13時30分、宮下秀樹会長の歓迎の挨拶から始まった。ひき続きプロジェクトを使い神崎忠男副会長が当会の歴史や、国内外の山岳会との関係、中高年の遭難について「オリエンテーション」を行なった。次に、山岳保険やホームページ、上高地山岳研究所について各担当委員から説明がなされた。記念撮影後、休憩。

後半は宮崎絃一常務理事の司会進行で「自己紹介と意見交換」に移った。山歴も経験もさまざまだが、入会を機にさらなる出会いを

期待しているように感じられた。

その後、委員会や同好会の説明や勧誘が行なわれた。締めは、懇親会。会長、副会長や理事、委員会、同好会員が新入会員を囲み、会場は大いに賑わった。18時ごろ散会となる。

(染合美佐子)

集会委員会

紅葉の燧ヶ岳と会津駒ヶ岳

10月14日から16日まで、青森、福井の遠路組を含む16人が、福島県・檜枝岐村に集結。紅葉真っ盛りの燧ヶ岳と会津駒ヶ岳に登った。この2山は、今年8月、新たに誕生した「尾瀬国立公園」の中にある、その意味では記念すべき山行であった。

15日、御池登山口から燧ヶ岳へ。赤い草を敷きつめたような広沢田代から熊沢田代へと、正面に山頂



霧の会津駒ヶ岳山頂にて

を見上げながら木道を快調に進んだ。だが2000m^{以上}を過ぎるころからガスがかかり、楽しみにしていた頂上からの尾瀬の眺望は得られなかった。

組富の山頂には大勢の登山者がいて、この山の人気の高さがうかがえた。何人かは隣の最高峰・柴安嶺まで往復した。下山は長英新道から大江湿原を経て沼山峠へ。道中、福井と千葉の参加者同士で漫才もどきの掛け合いが続ぎ、笑いが絶えない。山ではなく、寄席にでもいるようで愉快だった。

昔から農村では「明けの涙(雨)は氣にするな」(好天の前触れだ)と言われている。その格言のとおり

り、翌16日は明け方に驟雨(そうりゅう)が降ったものの、会津駒ヶ岳へ登り始めたころには晴れ間が覗いた。五合目付近では紅葉が見ごろで、木の間から漏れる光が、一行の体に赤黄、白の縞模様を作っていた。長いモミジのトンネルを抜けると、一気に視界が広がり、草紅葉に囲まれた駒ノ大池に出た。

先に見えるはずの山頂は霧の中に。緩い登りの木道を行くと狭い山頂に到着。記念写真を撮って下山。駒ノ大池に戻り昼食にした。駒ノ小屋は、本日で閉所らしく戸締まりでもしているのか、槌音がしていた。しばらくすると霧が晴れ、山頂が大池に映り、格好の被写体になった。

今年の紅葉はどの山域も1週間ほど遅れているとのことだが、当日の会津駒ヶ岳はちょうど見ごろであった。この山はダケカンバと針葉樹のオオシラビソが多く、ナカマドやカエデの類が少ないようだ。そのため、紅葉より黄葉が勝っていて、それがこの山の印象をひとときわ明るくしている理由だと思った。

(別所宗郎)

山研運営委員会

ブチオータムコンサート

初秋の9月22・23日、恒例の「ブチオータムコンサート」に参加した。今年のテーマは「ワインと生ビール、そして仲間と音楽と……」である。例年、別々に開催していた生ビールを楽しむ「星の会」と、アルプス民俗音楽とヨーデルを楽しむ「ブチオータムコンサート」が今年はジョイントして開催された。そのため、いつもの倍近い52名の参加者があり、大盛況であった。当日は15時30分から、山研改築に功労のあった元北九州支部長・吉村健児さんの乾杯の音頭でビールパーティの幕開け。同時に「ヤーガ・ハイスル」の軽快な生演奏が予定の時間よりも早く始まり、参加者は大喜びだ。

演奏者は、チターと手回しオルガンとヨーデルがリーダーの永谷義篤さん。田代依子さんはアコーディオンとカウベル、鈴木啓之さんはトランペットとアルプホルン。楽しい演奏は、ワインと各種のおつまみ、料理、そして夕食、演奏者との懇談を交えながら、なんと7時間以上も続き、参加者は十

分に満喫した秋の一夜であった。

23日は岳沢と上高地散策グループに分かれて行動。私は岳沢に参加した。山研委員の案内で、昨年雪崩で崩壊した岳沢ヒュッテ跡まで4時間30分かけて往復。下山後、山研でカレーライスの昼食会があり、「星の会」と「ブチオータムコンサート」を終了した。

このコンサートには過去数回参加しているが、会員のクラブライフのために企画・実施、苦勞されている山研委員にはいつも感謝している。皆さんも、一度参加されてみてはいかがですか。

(福岡支部 高木荘輔)

アルパインフォトクラブ

平成19年秋の撮影会

秋の撮影会は、10月20・21日の2日間、八海山の麓にあるペンション「わかい」をベースハウスにして、新潟県魚沼地方で行なわれた。参加者は22名で盛会であった。20日、関東地方はよい天気だったが、上越に入ったとたん天気が崩れていて地形の妙をつくづく感じさせられた。今年の山々の色づきは遅く、周りを見てもまだ緑が



「やまこし ありがとう まつり」に参加した

多いように感じた。17時、各地で撮影をしてきた会員が宿に集合。懇親会は18時より川嶋氏の挨拶、松本氏の乾杯、北村氏のデジタル写真の話、会員が撮影してきたポイントの情報交換など、写真談議で盛り上がった。話は尽きないが、新入会員を代表して夏原氏の一本締めで懇親会を終えた。

続いて、スライド映写による勉強会を行なった。佐々木氏によるネパール・ヒマラヤ、小田氏によるアンデスの山、新道氏による上越付近の山など、時間の経つのを忘れてそれぞれの個性豊かな映像に入見入った。

21日、カメラマンの朝は早い。

夜明けを待ちかねた数人は、初冠雪の八海山撮影に取り組んでいた。朝食の後、宿の前で記念撮影。雨こそ降らないが天気は悪い。

ほとんどのメンバーは、小幡氏がボランティアで通っている旧山古志村を訪問。3年前に起きた「中越地震」の被害地は、現在8割ほどが復旧している。この日、旧山古志村村民が、支援してくれた皆さんに感謝を込めて「やまこしありがとう まつり」を行なっていた。キノコ汁、つき立ての餅、コシヒカリのおにぎりなどが振舞われていた。現・衆議院議員(旧山古志村村長)の長島氏も見えていて、われわれ日本山岳会フォトクラブの訪問を大変喜んでおられた。

旧庁舎には、震災前と後の様子の写真が展示されていて、今後の撮影に大いに参考になった。

おまつり会場を後にし、旧山古志村の生活、風物の撮影に向かった。見事な棚田など撮るポイントが多く、心ゆくまで写真に収めることができた。

撮影会後、温かい人情にふれ名残りを惜しみながら帰路についた。

(山本武志)

支部

だより

岐阜支部

海外山行——ブータン見聞録

9月16日から26日まで、岐阜支部恒例の海外山行に参加した。今年には雷龍の国・ブータン、秋の祭りに合わせての計画である。

前岐阜支部長の高木崎男氏を隊長に総勢25名、大所帯での出発となった。

バンコクのホテルで1泊。早朝、ドルック航空機にてブータンに向けて出発。機内から眼下に、雪をかぶったヒマラヤ山脈が見えた時は感激した。急峻な谷間に家々が点在する光景に見とれていると、

突然、機体がふっと吸い込まれるように高度を落とした。そのまま着陸態勢に入る。スリル満点の着陸だ。その瞬間、一斉に拍手が起った。それは、パイロットの操縦の腕をたたえるものであった。

いよいよ、8日間のブータン観

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

光の始まりである。ブータンは、チベット仏教を国教とする王国である。各地に、役所、裁判所、僧院を備えたゾンと呼ばれる城砦がある。どの城砦も壮大・荘厳で、世界遺産にも匹敵するといっても過言ではないほど目を見張るものであった。経文が布に書かれたタルシンと呼ばれるのぼりが、至る所に立っている。また、経文が書かれた色とりどりの布は、万国旗のように風にたなびいていて、信仰の深さを感じさせる。

秋の祭りは、ブータン国民が最も楽しみにしているもので、学校も休みになる。その祭りを3カ所で見学した。ゾンの広場で、仮面をかぶった僧侶が舞う姿は、どこも見事であった。

ポプジカは、ヒマラヤ越えした鶴の飛来地である。その姿を想像するだけで、胸がワクワクした。

最終日は、断崖絶壁に建立され



著名な僧院、パロ・ゾン

ているブータン最高の聖地・タクツァン僧院を見学した。僧院まで登り3時間のトレッキングであった。最後の夜は、お世話になったスタッフの方々とのお別れ会を開催し、別れを惜しんだ。

最近まで鎖国していた国とは思えぬほど、今は、テレビや携帯電話が普及し、近代化の波が押し寄せている感じがした。反面、まだまだ素朴な人々には、独自の文化があり、今の生活を守り、国を大切にしている様子も、ひしひしと伝わってきた。

秋の祭りの時期に訪れることができ、大変意義深い旅であった。

(藤田純江)

熊本支部

支部設立50周年祝賀会

昭和32年7月13日に設立された熊本支部も、今年で設立50周年を迎えた。その頃は第二次登山ブームの真っ只中で、熊本でも何十もの山岳会が誕生したが、そのなかで今でも活動を続けているのは、我が熊本支部とその他に一つの会にすぎない。

登山界隆盛の時期に、山岳会をつくるのは容易な事だったかもしれないが、会の運営を続けていくなかで、社会や人の意識の変化などで行きづまり、そのほとんどが解散、消滅の道を辿っている。

熊本支部にしても、これまで順風満帆の時だけではなかったと思う。しかし、ともかく先輩会員は艱難辛苦の時節も乗り越えられて、50年間も活動が続いたことに敬服せざるを得ない。また、日本山岳会本部、九州各支部の存在、ご支援も大きな力になったことと思う。

11月17日、熊本交通センターホテルで熊本支部設立50周年祝賀会を開催した。日本山岳会本部から鰐坂副会長はじめ、関西、京都、その他九州各支部からお祝いに大



小春日和のなか記念登山を行なった、小岱山山頂にて

勢で臨席いただき、66名の参加者を得て盛大な祝賀会となった。支部長挨拶の後、鰐坂副会長から激励のお言葉をいただいた。特に、「各支部の活発な活動が、日本山岳会を支える」とのお言葉に身の引き締まる思いがした。

熊本支部をこれまで導いて下さった西澤健一、本田誠也両顧問に対し、支部員一同の感謝の気持ちを込めて表彰状を授与し、これまでのご苦労を労った。

記念講演は、関西支部長の重廣恒夫氏に快諾をいただき、「日本山

岳会とヒマラヤ登山」という演題で講演をしていただいた。これまで日本山岳会が、我が国の登山史のなかで、先導者としての功績をいかに残してきたか、よく理解できる話であった。また、会員のなかでもヒマラヤ高峰での登山経験者は稀で、講演での映像から、過酷な岩や氷壁に挑む隊員の姿に感動し、山の魅力の本質が見える素晴らしい講演だった。

夜の祝賀・懇親会は全国各支部から届けられた多量の地酒も手伝い、芸達者な多くの会員、各支部からの出し物が続き、底ぬけに盛り上がり、支部間交流も進んだ会となった。

翌18日は記念登山に55名の参加者を得て小岱山(501メートル)で行なわれた。この山は二市一町に跨る山体の大きな花崗岩の山。筒ヶ岳山頂には一等三角点が置かれ、山頂からの展望もよい全山天然林の山である。紅葉も美しいなか、爽快な記念登山ができた。

熊本支部も今年から、次の50周年に向け、鵬程万里の道のりを歩き始めたが、今回の祝賀会では支部外から30名を超える望外の参加者があり、激励をいただいた。我

が支部も、今回参加された皆様の大きなご支援を糧とし、支部員の山への至情と叡智を結集して支部活動を充実させ、100年目を目指したい。

この度ご厚意をいただきました皆様に衷心よりお礼申し上げます次第である。

(工藤文昭)



◎すべての登山者にぜひとも読んでいただきたい。

北アルプス 大日岳の事故と事件

斎藤藤生 編 / A5判 / 190頁 / 1995円

大日岳の雪庇崩落事故がなぜ事件になったのか。有為の少壮弁護士が事件の核心にせまり、雪氷学の権威が巨大雪庇の構造を世界にさきがけて明らかにした、リーダーの必読書である。〈梅棹忠夫氏 絶賛!〉

日本山岳会創立 100 周年記念出版

新日本山岳誌

日本山岳会 編

菊判 / 1992頁 / 18900円 / クロス装 カバー掛け 函入

今世紀最新・最大の山岳事典。北は国後・択捉から、南は南西諸島まで 4000 山を網羅。写真や地図をふんだんに使った登路図の解説から、山名の由来、山の信仰や歴史・民俗まで詳しく紹介する。

※日本山岳会の方は直接お申込みください。会員特別割引有り。

〒606-8161 京都市左京区 一乗寺本ノ町15 **ナカニシヤ出版** TEL.075-723-0111 FAX.075-723-0095

<http://www.nakanishiya.co.jp/> (表示価格は税込)



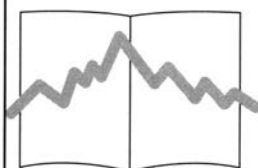
Wec

株式会社ウェック・トレック

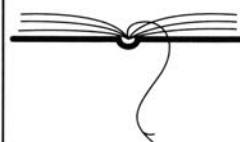
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員

〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階

電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp



図書紹介



溝手康史・著

『登山の法律学』



2007年7月
東京新聞出版局刊
四六判 360頁
定価 1699円

「登山にリスクはつきものである」。これは万人が認めることであるが、それは他のスポーツやレジャーに比べ、登山にかかわる自然条件が過酷であり危険であるからであろう。よって私達は自己責任において登山しているつもりであるが、法的にはそうとばかりは言えない。他のスポーツのように、たとえ死傷事故が生じてもルールに従ってさえいれば免責されるわけでもない。

本書は、登山家で弁護士として活躍する著者が、法律家の観点から登山にまつわるさまざまな法的

責任・諸問題について論じ、一般の人にも解りやすい言葉で解説している。

第一部においては53項目のケーススタディ（実際にあった事例も散見される）をあげて検証し、第二部においてはその総括ともとれる解説がされている。

登山中の不注意やミスで、他人に死傷事故を引き起こしたとき損害賠償責任が生じる。特にリーダーの立場である者の安全配慮義務が問われるケースが多いが、被害者の自己責任とのかかわりはどうなるのか。

事故が仲間内での登山の場合と、山岳会や大学山岳部での登山の場合はどうか。

ツアー登山や学校登山・講習会の場合なら参加者はガイドや先生・講師に安全への配慮を当然のことながら期待する。その意味で自主登山と引率登山の区別は重要

になるという。

また、死傷者の登山歴によっても自己責任の重みは変わってくる。さらに、登山の性格、一般縦走なのか、冬山登山なのか、沢・岩登りなのか、または海外高所登山なのか。危険性の高い登山になれば、自己責任の範囲も広がる。

昨年、大日岳における旧文部省登山研修所主催の雪庇崩落事故について、富山地裁判決が出されたことは記憶に新しい。

私たちは、常に自己責任で登山を行なう前提であることはもちろんではあるが、こういった場合に法的責任が生じるかを理解し、事故防止につなげることが重要である。

そういった意味で本書を一読することは法律の専門家でない私達の意識を向上させる良き指導書となるであろう。

なお、本書には登山とのかかわりの観点から、自然保護やペット連れ登山、ガイドブックの誤記、保険、休暇などについても法的見解が述べられている。

（木根康行）

邑田仁、鳥居塚和生・監修
大久保栄治、磯田進・編集

『富士山の植物図鑑』



2007年7月
東京書籍刊
A5変形判 311頁
定価 2940円

富士山は3776メートルの成層火山となつて約1万年余、自然界ではまだまだ若い山である。氷河期を過ぎてから生まれた山だけに日本の高山帯で見られるハイマツはなく、その代わりに地を這うようなカラマツが御庭あたりで見られる。五合目の樹林帯を抜けると植物の種類は極端に少なくなってくる。砂礫地になるとオンタデ、イタドリ、フジハタザオ等が目立つのだが、その植物群も最近では年々高所に上がりつつあるのが感じられる。

この植物図鑑には、富士山とその周辺地域で多く見かける植物が500種類選定され、解説されている。富士山周辺の植物群を詳しく知りたい人には待望の書であろう。

本書の特色は、地元で活動されている山梨県植物研究会の先生方

戦後まもなく、少年は一人で富士山に登った。そして山の虜になった。若さに任せて甲斐駒を夜行の朝帰りて登るなんてこともやっ



2007年7月
日本山書の会刊
菊判 348頁
定価 4000円

『書斎のビバーク』

野口冬人・著

(渡邊玉枝)

巻末には、写真撮影地、撮影年月日、および50音順索引が掲載されている。

が執筆しているとともに、語源や民俗誌、葉草などについても多くの情報を提供して、多方面から興味深く読めるように工夫した点にある。学術的価値を有する一方、富士山を訪れる人々に富士山の生

たし、岩登りにも熱中した。やがて発見したのが谷歩き、沢歩きの面白さ。しだいに若者は低山歩き、静観派登山の使徒となり、その道の第一人者になった。

彼が有数の山書蒐集家になったのも山に登るためだった。

「たとえ低い山であつても、歩くには何かの手引きがほしい。……しかし終戦直後の混乱期であるから、ろくなガイドブックなどなかった。せいぜいセンカ紙といわれる……紙質の悪い紙で造られた薄っぺらなものではなかった。／私は、古本屋をめぐって、昔の山の雑誌を集めた。その中には古い記録やガイドのたぐいがたくさん紹介されてあつて、それらが私の山行には随分役に立った」

これが山書の会会員・野口冬人氏の浩瀚な蔵書の原点である。だから氏は、ともすれば本の蒐集が自己目的化する書痴ではない。本書は「私の山旅と山の本のかかわりを幹にして、あれこれと気の向くままに」書いたエッセイ集だが、よくある稀覯本の自慢話などいっさいない。初版本に血道を上げるわけでもなく、読めるなら文庫本でけっこう、というおもむきがあ

る。そんな氏の心意気を物語るように、本書に収められた約50編の随想の大半を占める本は登山案内書で、文中にこんな述懐がでてくる。

「山のガイドブックというのは、とかく、／《山岳書の研究家、蒐集家には冷たくされている。ガイドブックは山の本ではない……》／などと片づけられている。／これは、可哀相である」

引越しを余儀なくされ、蔵書をダンボールに詰め込んだが、整理を怠ったため、なにがどこにあるやらわからなくなってしまうという近況を読んで、私は抱腹絶倒しながら、そういう「蒐集家」にかぎらない親しみを覚えた。

かつて「本会図書室のスペース難を緩和するためガイドブックを捨てる」という議論があつた。とんでもない話だ。ガイドブックといえども登山の歴史と文化を脈々と伝えていることが、本書を読めばよくわかる。

(平井吉夫)



図書受入報告 (2007年11月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
寺田政晴さんを偲ぶ会(編)	寺田政晴さんの思い出	75pp/21cm	寺田政晴さんを偲ぶ会	2007	発行者寄贈
金邦夫	金剛隊長の山岳救助隊日誌——山は本当に危険がいっぱい	279pp/19cm	角川学芸出版	2007	著者寄贈
渡辺信英・京極統一(共編)	北海学園大学北海岳友会 創立50周年記念号「こまくさ」第8号	251pp/30cm	北海岳友会	2007	発行者寄贈
齊藤誠(写真)富田幹太(文)	写文集 山のふしぎ	167pp/22cm	東京新聞出版局	2007	出版社寄贈
F・ハウス(著)駒沢敏器(訳)	トーテム・サーモン——聖なる生命サーモンのおしえ	318pp/20cm	山と溪谷社	2007	出版社寄贈
JN50記念協力会(編)	日本・ネパール国交樹立50周年記念誌 2006	160pp/30cm	J N50記念協力会	2007	発行者寄贈
JN50記念協力会(編)	ネパール活動団体ディレクトリー 2006年版	102pp/30cm	J N50記念協力会	2007	発行者寄贈
第22回実行委員会(編)	日本ヒンズークシュ・カラコルム会議 第22回会議資料	73pp/30cm	第22回実行委員会	2007	発行者寄贈
清原紳一(編)	日本の100人 第94号「植村直己」	32pp/30cm	デアコスティーニ・ジャパン	2007	十象舎寄贈
松本莞爾(編)	日本山岳会熊本支部設立50周年記念誌	104pp/30cm	日本山岳会熊本支部	2007	発行者寄贈
中央大学山岳部(編)	目で見える中央大学山岳部の80年	71pp/25cm	中央大学山岳部	2007	発行者寄贈
Peter Gillman (ed.)	Everest——Eighty Years of Triumph and Tragedy	240pp/32cm	The Mountaineers	2000	加納巖氏寄贈

会務報告

平成19年度第7回(11月度)理事会
日時 19年11月14日 18時30分
21時10分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】宮下会長、鰐坂、神崎各副会長、吉永・宮崎・成川各常務理事、石橋・古野・太田・堀井・相馬・山川・岡部各理事、竹中監事、近藤常任評議員

【委任】斎藤・藤井各理事

【欠席】深川監事、日下田・河野各常任評議員

【審議事項】

1・上半期監査報告(竹中)

11月29日、竹中・深川各監事、及び吉永・宮崎各常務理事、岡部理事立会いのもとに会計監査を行った。おおむね適正に執行されている。

2・平成19年度秩父宮記念山岳賞候補(宮崎)

本年度は秩父宮記念山岳賞審査

委員会(村木潤次郎委員長)から松本健夫会員の「崗日嘸布(カンリガルボ)山群の踏査と研究」がふさわしいとの選考結果が報告された。(承認)

3・平成19年度名誉会員候補(宮崎)

去る11月27日開催された評議員会で次の3名が名誉会員に推薦され決定した。

No.2824 若林啓之助氏

No.4440 平山善吉氏

No.5775 黒石恒氏

4・「ミウラ・ベースキャンプ」の利用割引制度(古野)

本年12月より「ミウラ・ベースキャンプ」の高所テストと低酸素トレーニングの利用料金の10割会員割引を実施する。事務局で会員証明書を受け取り申し込むこととした。(承認)

5・山岳会ロゴマーク使用許可申請(宮崎)

宮崎支部から第23回宮崎ウェストン祭、並びに北海道支部交流登山に係る記念品としてのTシャツにロゴマークの使用許可申請。(承認)

6・資料映像委員会特別予算(吉永)

山岳会創立100周年記念連続講演会(全5回)資料映像化(外部発注複製DVD作成 各35枚×5) 6万円 (承認)

7・終身会費の取崩し及び永年会員等の協力金について(宮下会長)

終身会費を年に10割を限度として取崩しを可能にしたい。7年後には300名程度の新永年会員が誕生し、財政を圧迫しかねない。会報『山』、年報『山岳』、通信費などでの経費等を考慮し、任意での実費負担をお願いしたい。(継続)

【報告事項】

1・文部科学省実地検査(吉永)

去る10月23日、吉永常務理事・岡部理事の立会いのもと、文部科学省スポーツ局の実地検査が行なわれた。おおむね良好との評価であった。後日文部科学省から正式の報告がある。

ヨーロッパ・アルプス・スキー

●ツェルマット・スキー 9日間

出発日:2/9 旅行代金:¥408,000

●シャモニ・モンブラン・スキー 8日間

出発日:3/8 旅行代金:¥468,000

●コルチナ・ダンベッツォ・スキー 8日間

出発日:3/15 旅行代金:¥478,000

国土交通大臣登録旅行業第490号/社日本旅行業協会正会員 ©ボンド保証会社
ALPINE TOUR SERVICE 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階 ☎03-3503-1911

大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail:info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

2・広島支部創立10周年記念式典(吉永)

11月3日、吉永常務理事(会長代理)出席。神崎副会長講演。盛会であった(80名出席)。

3・クビ・ツァンボ源流域学術登山隊2007報告会・祝賀会(宮崎)

11月4日、京都に於いて開催。宮崎常務理事(会長代理)出席。盛会であった(70名出席)。登山隊に参加した学生を中心に、関西学生部立ち上げが進んでいる。

4・森川洋祐氏を偲ぶ会(宮崎)
都岳連主催。宮下会長出席(80

名出席)。

5・図書室の絨毯張替え・換気扇の取替え(宮崎)

書棚の入替えなど終了し通常に戻る。

6・セミナー・雪山救助現場の実際(古野)

11月6日、千駄ヶ谷東京体育館で開催。講師、長野県警航空隊の柄澤副隊長。108名の若者の参加あり、内容が濃い良いセミナーが出来た。

7・平成19年度永年会員(宮崎)

今年度は36名が永年会員になり晩餐会に招待した。現在20名出席予定。

8・平成20年度全国支部懇談会(神崎)

次年度は北九州支部主催で平成20年10月11日(土)12日(日)開催予定。

9・寄付金受領(吉永)

新永年会員になられた会員番号4553・高本孝会より寸志として10万円の寄付があった。

10・上高地山岳研究所の閉所(太田)

本年は11月11日で閉所。

11・学生部マラソン大会(相馬)

第44回山岳会学生部マラソン大会が開催された。20チーム(約1

00名)参加。表彰式に宮下会長、吉永・宮崎常務理事が出席した。

12・新事務局員の採用(宮崎)

予てより募集していた新事務局員として時日真理さんを採用、平成20年1月より勤務する。

13・スイス・ポントレジーナ国際総会報告と山岳救助関係者交流会(神崎)

11月16日、国際オリンピック記念青少年センターにて。

14・その他(神崎)

第2回ピオレ・ド・オール・アジア(ゴールデンピッケル賞)授与式。11月2日、韓国ソウルで開催。中村保会員が審査委員長。神崎副会長出席。

15・クライミングワールドカップ開催(神崎)

10月13、14日に開催された。1500の観覧席は満席。ドーピング検査を行った。(堀井)

16・収益の寄付(山川)

俳優の玉木宏さんより、映画の宣伝グッズ販売に伴う収益の一部を、山岳環境保全のため日本山岳会自然保護委員会に寄付するとの申し入れがあった。

17・会報編集報告(成川)

『山岳』及び会報『山』発行予定

と内容についての報告。

18・委員会報告

19	図書管理委員会(石橋)、図書委員会(石橋)、医療委員会(堀井)、山研委員会(太田)より報告。
18	10・10月度入会者13名
17	ルム目誌 11月
16	1日 アルパインスキークラブ 01会
15	5日 総務委員会 集会委員会
14	6日 図書委員会 アルパインスキークラブ 九五会
13	7日 常務理事会 集会委員会 101会
12	8日 図書管理委員会 自然保護委員会 山の自然学研究会
11	9日 自然保護委員会 フォトビデオクラブ
10	12日 総務委員会 アルパインスキークラブ
9	13日 自然保護委員会 二火会
8	14日 アルパインスキークラブ
7	15日 理事会 山想倶楽部 休山会 山岳地理クラブ
6	16日 科学委員会
5	17日 図書委員会 資料映像委員会 海外委員会
4	18日 インターネット小委員会
3	19日
2	20日

◆シンポジウム開催のお知らせ
 日時 08年2月1日(金)
 17時〜20時45分
 場所 東京体育館第1会議室
 科学委員会

INFORMATION
 演題 「現代登山とGPS」
 ●基調講演「GPS活用の現状と可能性」芳野赳夫氏
 ●講演1「カシミールとGPS」田代博氏

21日 アルパインスキークラブ
 三水会 つくも会
 22日 総務委員会 山遊会 アルパインスキークラブ
 26日 総務委員会 資料映像委員会
 27日 総務委員会 ゆきわり会
 28日 総務委員会 自然保護委員会
 会 麗山会
 29日 総務委員会 新土曜会 千葉支部
 30日 総務委員会 プモリ会
 11月来室者629名

鈴木和夫 (13172) 07・11・24
 鶴岡節子 (13982) 07・11・24
 吉澤宣哉 (14396) 07・11・24
 平島精一 (8607) 07・11・30
 退会
 北川豊培 (5340) 福岡
 高木志茂子 (7651) 京都
 上横手健義 (10195) 関西
 榊田検二 (10861) 北海道
 安嶋伸一 (12083) 北海道
 倉岡啓吉 (12129) 北海道
 高野良之 (12965) 福岡
 山田尚夫 (13423)
 終身会員 小島守夫 (6189)
 改姓 武藤信子 (10483) 広岡信子

会報『山』合本・製本のお知らせ

事務局

会報701〜750号の合本をご希望の方は2008年2月末までに現本を事務局までお送り下さい。

1. 製本業者は前回(2003年10月)と同じです。
 - 全面同色(ブルーグレー)ハードカバー
 - 背表紙にタイトルと会員番号を印字
 - 索引は巻頭綴り
2. 欠号分は各号150円で補充可能です。但しバックナンバーに在庫が無い場合にはコピーで代用になります。
3. 製本費用は梱包・返送費用を含めて4000円です。来室受取りの場合は800円引きですので、その旨をお書き添え下さい。代金支払いについては、書籍返送時(2008年4月頃)に振込用紙を同封します。
4. 過去の会報についてもお引受けします。ご不明な点は事務局までお問合せ下さい。

●講演2「高所登山への応用」大蔵喜福・宮崎絃一各氏
 ●講演3「国内登山での使用体験」安井康夫氏
 ●パネルディスカッション「G

◆第17回「山好きの山の絵展」
 アルパインスケッチクラブ
 会期 08年2月17日(日)〜23日(土)
 10時〜19時(初日は12時から、最終日は17時まで)
 会場 東京交通会館2Fギャラリ
 1(千代田区有楽町2-10-1)
 TEL 03-33215179
 62 最寄り駅 JR有楽

PSの賢い使い方
 司会 芳野赳夫氏と全講演者
 定員 先着100名
 申込 平野裕也まで
 FAX 03-3484-8968
 E-mail nihon@3ipc-seijo.com



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
 (国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
 大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
 名古屋/〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

●さんけん通信●

人と自然、冬にむけて

山研管理人 内野慎一



初冬の装いに変わった上高地

閉所間近の11月7日、上高地の関係者が集まって刈り払いを行ないました。環境省をはじめとする行政の方々や、ホテルや旅館はもとより上高地に関わる企業の方など、ざっと50人もの人たちです。めいめいに鎌やナタやのこぎりを持参しています。

遊歩道で通行の支障になってる木や危険な枝を切ったり、道に覆いかぶさっている笹を刈り払う作業を行ないました。

六百山から、日が出る前の寒いうちから始めましたが、手を動かすとともに日も差し、ほどなく上着を脱ぎ、汗ばみながら働きました。

ところで、枯れて腐った枝が落ちるところを見たことがあるでしょうか。枝といっても上高地の大きな木ですから、太い大きなものです。雨を吸い込んでその重さに耐えられなくなって、ドッシーンと落ちるのをたまに聞きます。私が初めて見たのは雨が上がった後の風もない静かな森の中で、いきなり大きな音が響き、肝を冷やしました。雷の音にたとえると少々大げさですが、木からクマでも落っこちてきたのかと思いました。

そのような危険な枝を前もって切っておくことも今回の大事な作業でした。背伸びをして柄の長い鎌で払おうとしたら、えいっと力を込める前に落ちてきて、慌てて跳んで逃げたというようなこともありました。

ひと息ついている時のこと。「前はこんなに暖かくなかった」「まだシーズンの終わりという気

がしない」と上高地に昔からいる方から聞きました。昔はもっと寒くて寒くて、追い立てられるように町に下りていったということでした。

穂高は白く、梓川を渡る風こそ冷たいものの、体はポカポカ、葉が落ちて日当たりもよい林の中。カラマツの金色の葉をサラサラと浴びながら、確かに暖かい。本当にこれで大丈夫なのだろうか、と思いました。

そしてその後すぐ、山研は11月10日と11日に閉所作業を行ないました。あいにくの雨で、濡れると体の芯から冷えましたが、山研委員の皆さんと力を合わせて重い雪囲いで周りを固め、水場を撤収し、山研の中をきれいに片づけました。

11日に閉所作業を終え、私たちは翌12日に荷物を積み込んで下りたのですが、天候が急変しました。雨が雪に変わり、一晩で15センチくらい積まりました。重たい湿った雪が着いたため、枝が信じられないほどしなってしまい、車が通れないほどでした。

それまでは暖かかったのですが、いよいよ人をよせつけない寒い季節が来たのだと感じました。最後に帳尻を合わせたのでしょうか。

今頃は、山研には人氣も火の氣もなく、しんしんと冷えていることでしょう。年末年始の開所までしばらく冬眠です。

今シーズンもありがとうございました。

◆編集後記◆

●11月の連休に遭難事故の知らせが飛びこんできました。北海道支部11名の上ホロカメットク山の雪崩事故です。悲しみのなか、支部長の長谷川雄助氏に概要を伝えてもらいました。こうした事故が2度と起きないよう、詳しい報告が待たれます。亡くなられた4名の方のご冥福をお祈りいたします。

●今年の年次晩餐会も滞りなく終わりました。会報編集で、1年があつという間に過ぎてしまいます。今年もほんとうにお世話になりました。どうぞよい年をお迎えください。

(神長幹雄)

町駅、地下鉄有楽町線有楽町駅A8番出口)
*問合せは田辺寿、深川安明、木村泰助まで。入場無料。

日本山岳会会報 山 751号

2007年(平成19年)12月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社